

Hirosaki
MOCA
Letter

vol.08

TAKE FREE

弘前 れんが倉庫 通信

弘前れんが倉庫美術館を
もっと楽しむフリーペーパー

特集：2023年度 展覧会レビュー

「大巻伸嗣—地平線のゆくえ」
—四方幸子「循環する、始まりと終わり」

「松山智一展：雪月花のとき」
—村上綾「時代の距離の生む視点」

〈わたし・アート・まち〉 奈良匠
〈スタッフに聞きました！〉 小田桐史絵

2023年度 春夏プログラム
大巻伸嗣—地平線のゆくえ
OHMAKI Shinji
—Before and After the Horizon
2023.4.15-10.9

大巻伸嗣(1971年、岐阜県生まれ。神奈川県在住)は、「存在」とは何かをテーマに、空間全体を変容させるインスタレーション作品やパブリックアートを発表しています。本展では、近年の代表作の一つ「Liminal Air Space-Time」のシリーズをはじめとするダイナミックなインスタレーションや、地元の人々の協力を得て制作された作品などが展示されました。展覧会に際し、大巻は青森県内各地を訪れ、この土地の風物や自然、信仰の形などをリサーチして、生と死が円環を成すような死生観をテーマにした展示をつくり上げました。



《Oak Leaf -the Given- (Right)》2023年



《Echoes Infinity -trail-》2023年

2023年度は、2つの展覧会を開催しました。

批評家、学芸員によるレビューとともに展覧会を振り返ります。

循環する、始まりと終わり

四方幸子 キュレーター／批評家

大巻伸嗣の東北初の個展は、新作そして新たな要素を加えた代表作で構成された壮大なものとなった。大巻は、弘前や青森の地の自然や人間や人間以外のいのちの営みを感じし、自らの身体とも重ねながら本展を編み上げたといえる。

大巻が生み出す世界は、根底にダイナミックなプロセスを潜ませながら、しばしばミニマルでストイックな様相を呈している。時には漆黒の空間、また繊細な現象や表現が提示され、作品を前にしたり空間に入っても、知覚や身体性が馴染むまでに時間を要することもある。ここでは作品を体験していくプロセスも、作品の一部となる。「地平線のゆくえ」と名づけられた本展も同様に、訪れた人々が空間と時間を丹念に探求していく旅であったといえるだろう。

入口では、柏の葉の図像に出会う。弘前・鬼沢地区の伝説の柏の木のもので、そこに重なるラインは大巻の手のひらの血脈だという。夜の山に微かな光が見える写真を経た次の空間は漆黒で、人々は身体の輪郭も方向もわからない中、光玉が下降し煙となり消滅する現象に遭遇する(足元の硬質な感触、歩く時の音…)。次室には、植物が山の輪郭に描かれた白い絵があり、加えて山が水平線の向こうに反転して

映る光景が浮上する。それに面した壁では、山のような錐体の窪みが闇の中の消失点を示している。

漆黒の暗闇、謎めいた図像や現象、絵…出会うものは、人々の知覚や身体にゆるやかに浸透しながら、想像力を喚起させていく。そのような中、木々が立ち並ぶ空間に至った人々は、木やその根元にたたずむ石や木(漂流物)が、その形態へと至るまでの壮大な時間と移動に思いを馳せ始めるだろう。

進めば突然空間が開け、白い薄布が、広大な空間でうねり波打つ世界が出現する。波が寄せる海辺にいるかのように、形が変容し続ける美しさは息を呑むほどで飽きることがない(自然がそうであるように)。大巻の真骨頂でもある動的な「彫刻」の一つだが、青森の風景に触発され、津軽の人々の声や呼吸を音に取り入れたという。ふとC・D・フリードリヒの《海辺の僧侶》が想起されるが、ロマン主義的な自然との対峙や崇高化ではなく、人々が環境(作品)の一部であり、自身の動きや呼吸によっても空気を変動し起る循環こそが本作では重要である。2階は、絵やインスタレーションによる白黒世界から始まる(ここから薄布の「波」が見下ろせる)。巨大な壺の絵はその表面がひび割れており、床上にはつなぎあわせた世界地図が無数の線とともに描かれ横たわっている。その上を弘前の岩木山をめぐる空と大地をモチーフにした金属彫刻が、ゆっくり回転しながら空気を攪拌し続けている。

岩絵具が鮮やかな層を成すガラスが並ぶ通路を抜けると、白いフェルトを敷き詰めた床全面に花や紋様が描かれた明るい空間が広がっている。代表作の一つだが、本展では、人々がその中央を直接歩くことで、次第に絵がかき消されていく。岩絵具が、空中や床面へと拡散するプロセスも、大巻にとっての「彫刻」であるだろう。

暗闇に浸り、その後さまざまな空間や現象をめぐって到達した彼岸のような白い空間を抜けると、《Before and After the Horizon》(本展の英語名と同名)が上映されている。弘前や県内で撮影された瑞々しい映像とともに、アントニオ・カルロス・ジョビンの曲「3月の水」の歌詞が、津軽弁となり地元の文脈も反映した言葉で生き生きと語られる。

そして最後に人々は、ふたたび柏の葉と大巻の血脈(左手)を藍染めにした暖簾に出会う。それをくぐり抜け、「地平線のゆくえ」の旅は終わる。

本展は、境界にまつわる体験そして考察の旅でもある。ここでの「境界」は、現象や知覚を通して時間とともにダイナミックに変動するものである。そして大巻の「彫刻」が、まさに境界の変動自体を体現する変容態としてあり、各人の旅がそれぞれにとっての知覚できない境界へと眼をむけ始める契機となるだろう。

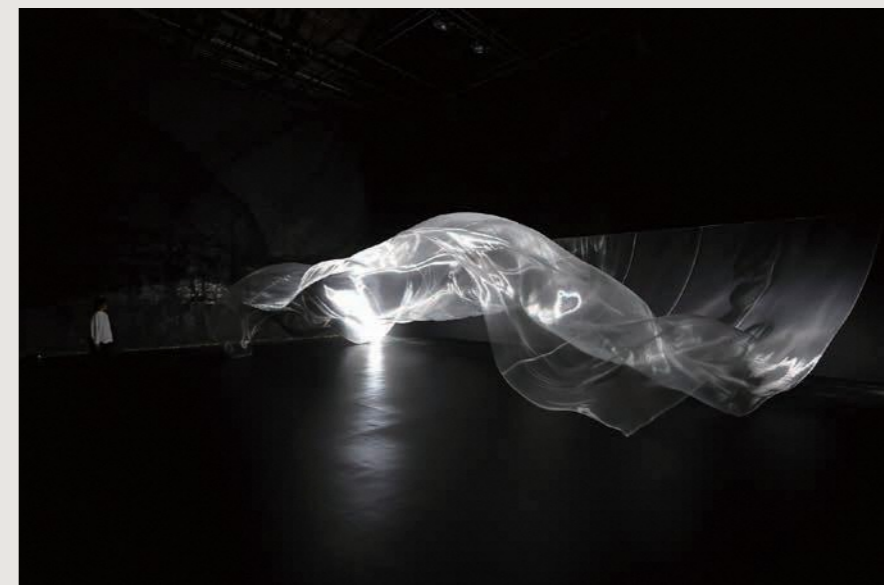
本展はまた、「呼応」と「循環」というプロセスから読み取ることができる。これらは、本展が柏の葉と大巻の左右の手の血脈を「阿吽(あうん)」と見なし、入口・出口に配置したことにも見て取れる。呼応や循環は、作品相互においていくつも起きており、*1それが最初と最後の「阿吽」の中で共鳴し大きな呼応と循環を生み出している。

加えて重要なのが、知覚できない呼応や循環を掘り起こすことである。それは無意識的なもの、内面化されたもの、概念的なものなどであり、実際の空間においては空気が最も重要であるだろう。白い薄布が可視化する風、壺の絵の表面の亀裂を招く現象、回転運動、拡散する岩絵具…来場者の動きや呼吸も含まれる、空気に媒介された空間内の事象…そしてその総体が、終わらない「彫刻」となる。

最後に、大地と空気がつながる地平線に思いを馳せる。その彼方は見るができないが、進むことで新たな大地が開けてくる。そして進み続けると、地球を一周し元の場所に回帰する。手のひらから始まり、手のひらで終わる本展は、地球とともに大巻の身体を循環する「旅」でもある。両手を合わせると、境界を超えて始まりと終わりが循環し始める…地平線のbeforeとafterがつながるように。

*1

たとえば光(《A Blink of Eternity》と《sink》)、山(《Echoes Crystallization: Horizon》と《Depth of Shadow -Vanishing Point-》)、森と海(《KODAMA》と《Liminal Air Space-Time: 事象の地平線》)、回転と壺(《Flotage》《Liminal Air -core-天 IWAKI》《Liminal Air -core-地 IWAKI》)、岩絵具(《Glass of Echo -Hirosaki-》での堆積と《Echoes Infinity -trail-》での拡散)など。



《Liminal Air Space-Time: 事象の地平線》2023年



左上から右下へ:《Abyss》2017年、《Liminal Air -core- 天 IWAKI》2023年、《Liminal Air -core- 地 IWAKI》2023年、《Flotage》2004-2006年



《Oak Leaf -the Given- (Left)》2023年

2023年度 秋冬プログラム
松山智一展：雪月花のとき
MATSUYAMA Tomokazu:
Fictional Landscape
2023.10.27-2024.3.17

松山智一（1976年、岐阜県生まれ、ニューヨーク在住）による日本の美術館での初個展。松山は、伝統的な絵画から身近なものまで様々なイメージを引用する「サンプリング」の手法を用いて、絵画や彫刻を制作しています。本展では「Fictional Landscape」シリーズをはじめ、コロナ禍を前後する時期に制作された近作や新作を中心に紹介。絵画に用いられた色彩とつながる色とりどりのカーペットや、異なる時代や文化から引用された壁紙など、展示空間も細部にまでこだわり、作家の繊細かつ大胆な作品群を展示しました。



1 展示室内のオブジェ



2 《Black Mao, Yellow Beuys (ブラック毛沢東、黄色ヨーゼフ・ボイス)》2023年

時代の距離の生む視点

村上 綾 青森公立大学 国際芸術センター青森 (ACAC) 学芸員

展示室の入り口で「Welcome」と書かれた陽気なマットに出迎えられ奥に進むと、平面の作品群が、仮設壁に支えられて、彫刻のように林立する空間に入る。縄文土器を模したオブジェクトもあり、作家が青森での公開を楽しんでいるのも分かる。ポップな色味の松山智一の絵画の中の世界に迷い込んだかのように動き回ることができた。

絵画作品には質感の提示は最小限で、影は画面には落ちていない。よく見れば松山の描く正面の人の顔には鼻が無い。自明の機能は省略されて画面のフラットさを支え、伝統的な模様があしらわれた人物の衣服や背景、そしてネオンのような色味で時代も場所も攪拌された現実味のない画面を担保する。

弘前れんが倉庫美術館の巨大な吹き抜け部分では、ステンレススチールで造形された彫刻が軽やかに重力に逆らってダイナミックに伸びている。軽やかさの一方で支える構造部分を見れば、非常に重いものだという事も分かる。工業製品で良く見る穴あきの面と、植物を思わせる模様のある面とが見え、絵画作品と同じく、現代と伝統のパターンが組み合わせられている。

現代から過去の文化を見ていくと、その当時にあった質感が零れ落ちることがある。例えばデジタルネイティブ世代には、どの時代のポップミュージックも同時に耳に流れ込んでくる。そこにはレコードの重さの心地よさやCDケースの開けづらさの苛立ちもなく、ブラウザ上の

ボタン一つで名曲にアクセスできる。ジャケットのインクの色の違いも臭いも体感しない。そういった時代の空気まで含む質感は尊びながら、時系列に歴史から学ぶことで新規性を生み出す生真面目さは、時に大きな足枷になるかもしれない。現代では、著名人の自分語りのライナーノーツを読む代わりに、共有サイトで多様な意見を受け取ることも可能である。

私が思うに、松山の独自の手つきは、現代からの視点を維持して距離を持ったまま、伝統模様も現代美術も参照していく点である。伝統的なメディア（絵画、彫刻）を採用し、絵画では相性の良い文様のフラットとポップ・アートのフラットをつなぎ、彫刻では現代／伝統的な文様とともに躍動感を増幅させる。しかしそれはあくまで、作品がその美術の流れを汲んで、そこに位置する手を打つという手堅さよりもむしろ、遠く今の時代から、重なる時代のレイヤーを透かして見て、その組み合わせや食い違いまでも遊ぶような軽やかさを感じるのである。

本展では大規模な作品に圧倒されながら、キャプションを見れば個人蔵も多いことにも気が付く。不躰に所有者が作品を置く場所を想像しながら、その居心地について考えてみる。松山作品の色鮮やかさ軽やかさそしてその精緻なディテールを眺めること以上に、分野区分や時代の流れにもたじろがない松山の作品の堂々としたその清々しさを感じる事が出来るのだろう。松山作品は、過去も未来も現在からしか眺めることの出来ない私達に、自らの視点で古きを振り返り、新しさへ向かう希望を与えて対峙させる。



3 左から《Wanderlust Innocence (誠意ある放浪癖)》2019年、Yuichi Kawasaki氏蔵、《Sing It Again Sweet Sunshine (甘い陽光が再びさえずる)》2019年、OKETA COLLECTION、《Desktop Utopia (デスクトップ・ユートピア)》2020年、個人蔵



4 展示風景



5 展示室入口

PICK UP!

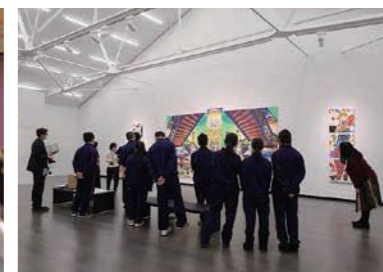
松山智一展×弘前の若者たち

本展の開幕直後に開催されたユース・トークセッションでは、弘前市内の大学に通う学生6人がインタビュアーとして参加しました。学生たちは緊張しながらも、展覧会を観た感想も織り交ぜながら松山さんに質問を投げかけました。松山さんにはご自身の若い頃の経験を織り交ぜながら、制作への思いや作

品の背景など、たっぷりとお話いただきました。また会期中には演劇教育の手法を取り入れた鑑賞プログラムを実施しました。弘前市内の中学2年生10人が参加し、作品をじっくり鑑賞した後、感じたことを元にそれぞれ詩を創作。さらに複数人でひとつの詩を作り上げるグループワークも行いました。



ユース・トークセッションの様子



中学生を対象とした鑑賞プログラムの様子

PICK UP!
PEOPLE

美術館とまちをつなぐ
わたし・アート・まち



和田誠の装丁集と 佐藤春夫のクロス装丁文庫本

まわりみち文庫 奈良 匠さん

2020年7月、生まれ育った弘前市で、新書と古書の両方を扱う「まわりみち文庫」を開きました。

本屋に憧れたのは、青森市の「古書らせん堂」に行ったことがきっかけです。それまではビジネス書や自己啓発本ばかり読んでいましたが、らせん堂で様々なジャンルの本にふれ、読書の幅が広がっていく楽しさを知り、こうした店を自分でもはじめたいと思うようになりました。

このころ特に感銘を受けたのが、デザイナー・和田誠さんの装丁集です。読んでブックデザインと装丁に関心を持ちましたし、掲載された本を書店で探しているうちに、本棚を見ることそのものが楽しくなってきました。

まわりみち文庫を開いてから感銘を受けた本もあります。それが、お客さんから買い取った、佐藤春夫著『厭世家（えんせいか）の誕生日』（改造文庫、1929年）。文庫本ながらクロス装丁、箔押しという手の込んだ作りで、長く読んでもらいたいという意識が伝わってきました。まわりみち文庫でも、買った人がずっと大切に

手元に置きたいと思える本を、店内にそろえていきたいと考えています。（談）

【まわりみち文庫】

多ジャンルの新書・古書が並ぶ小さな本屋。店名には「検索による近道だけでなく、散歩のまわり道を楽しむように、読書で興味を広げてほしい」との奈良さんの思いが込められている。

弘前市新鍛冶町9-5
TEL 090-1300-9651
営業時間13:00~21:00
木曜定休



聞き手・文：ものの芽舎 撮影：成田写真事務所

STAFF
VOICE

美術館のおしごとアレコレ
スタッフに聞きました!



弘前れんが倉庫美術館 Members #08

運営チーム 小田桐 史絵

経理担当の小田桐史絵さんは地元弘前市出身。税理士事務所にて17年勤務した経験を生かして、開館時から運営を支えています。

もともとアートや美術館が大好きで、社会人になってからは、年に一度、美術館を1館選んでの旅をしてきました。

「印象深かったのは千葉県ホキ美術館や鳥取県にある植田正治写真美術館です。ほかにも香川県への旅で訪れた地中美術館のクロード・モネ室。《睡蓮の池》をはじめモネの作品を見せるための、工夫に工夫が重ねられた空間に感動しました」と小田桐さん。モネ室では幸運にも一人貸し切り状態で鑑賞するという贅沢な経験も。

そんな美術館ファンだけに、今、大好きな美術館で働いていることが、たまらなくうれしいそうです。

「建物も素敵だし、弘前の街に溶け込みながら、新しいアートの風を吹き込んでいるこの美術館を、より多くの方に知っていただきたいです」と願いを込めて、きょうも書類や数字に向き合います。

聞き手・文：ものの芽舎 撮影：成田写真事務所

Exhibition information 展覧会情報

「AOMORI GOKAN アートフェス 2024」メイン企画

はかな きら
蜷川実花展 with EiM: 夢も煌めく境界
Where Humanity Meets Nature



しらかみのぞきみこう
弘前エクステンジ#06「白神視見考」

会期：2024年4月6日（土）～9月1日（日）

AOMORI GOKAN ▲
アートフェス WEBサイト

写真家・映画監督の蜷川実花とクリエイティブチーム・EiMの協働による展覧会では、うつろう時間やながれゆく季節の境界を超える壮大なインスタレーションや、弘前をはじめとする桜の写真を紹介します。



蜷川実花《花、瞬く光》2022年
©mika ninagawa, Courtesy of
Tomio Koyama Gallery

白神山地をテーマとするリサーチ・プロジェクト「白神視見考」では、狩野哲郎、佐藤朋子、永沢碧衣、L PACK,らによる展示や各種イベントを開催します。



狩野哲郎《系（水平の車輪、マーブル、集中線）》
2024年 Courtesy of the artist

HIROSAKI
MUSEUM OF CONTEMPORARY
ART

弘前れんが倉庫美術館

【開館時間】9:00~17:00

※但し、金曜日・土曜日に限りスタジオ、ライブラリーのみ21:00まで開館

【休館日】火曜日（祝日の場合は翌日に振替）、年末年始

【TEL】0172-32-8950 【Mail】info@hirosaki-moca.jp

〒036-8188 青森県弘前市吉野町2-1

当館には駐車場はございません

※お車でお越しの際は近隣の有料駐車場をご利用ください

【表紙写真】撮影：畠山直哉 【編集協力】ものの芽舎 【デザイン】デザイン工房エスパス 【印刷】凸版メディア株式会社

【編集・発行】弘前れんが倉庫美術館（指定管理者 運営業務担当 エヌ・アンド・イー株式会社）【発行日】2024年3月1日